

2021年度 第1回 豊岡市総合教育会議（定例会）議事録

○ 開会及び閉会の日時及び場所

2021年5月24日（月）

場 所 豊岡市役所 3階 庁議室

所在地 豊岡市中央町2-4

開会時間 午後3時30分

閉会時間 午後5時

○ 出席者及び欠席者の氏名

出席者 豊岡市長 関貫 久仁郎

豊岡市教育委員会

教育長 嶋 公治

委員 佐伯 和重

委員 向井 美紀

委員 飯田 正巳

委員 成田 壽郎

○ 事務局等関係者の氏名

事務局 教育次長 堂垣 真弓

教育総務課長 永井 義久

こども教育課長 和田 晃典

こども教育課参事兼教育研修センター所長 内海 忠裕

こども育成課長 木下 直樹

こども育成課参事 山本 加奈美

教育総務課参事兼課長補佐 木之瀬 晋弥

教育総務課総務係長 藤田 祐

政策調整部長 塚本 繁樹

政策調整課長 井上 靖彦

○ 日程

1 開 会

2 あいさつ

3 協議事項

(1) 第4次とよおか教育プランについて

4 その他

5 閉 会

○ 会議の概要

## [日程 1 開会]

(堂垣教育次長)

ただ今から、2021 年度第 1 回豊岡市総合教育会議を開会いたします。会議で活発な意見交換ができますように、会議の主宰者であります市長に代わりまして、私が司会進行をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。会議時間は 17 時までを予定しておりますので、よろしくお願いいたします。

ここで改めまして、総合教育会議の概要につきまして、ご説明をさせていただきます。この総合教育会議は 2014 年の地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正により設置されたもので、市長と教育委員会がより一層民意を反映した教育行政を推進するために、意思疎通を図る場として設置された会議であります。市長が主宰者で、市長が招集することになっています。具体的には、市長と教育委員会という対等な執行機関同士がそれぞれの権限に属する事務の調和を図り、重点的に講ずべき施策等について、意見交換する場となっています。概要説明は以上となります。

では、次第の 2 に移らせていただきます。開会にあたりまして、会議の主宰者であります関貫市長よりごあいさつを申し上げます。

## [日程 2 あいさつ]

(関貫市長)

皆さん、こんにちは。私自身が今日初めての出席ということで、右も左も分からないところがあります。そういった意味では、皆さんに指導いただくよりありません。活発な意見交換ができればと思います。今日はありがとうございます。

(堂垣教育次長)

次に、教育委員会を代表いたしまして、嶋教育長よりごあいさつをお願いします。

(嶋教育長)

関貫市長が就任されて初めての総合教育会議ですので、法的なものも含めて、少しあいさつ代わりに説明させていただきます。

今、次長が言いましたように、2014 年にこの会議ができました。会議ができた背景には、教育委員会制度がその年に改正されたことがありました。きっかけは天津市の中学生のいじめ、自殺の事件に端を発します。その時に、天津市の教育委員会はすごく批判を受けたのですが、その批判内容の 1 つは、スピーディーに学校への指導ができなかったということ。2 つ目は、隠蔽だと言われた状況があったということです。これを制度的に見直そうということで、教育委員会制度が見直されました。そのことを地教行法という法律に書くことになりました。

それで、大きな改正点は、教育長と教育委員長がいたのですが、どちらが責任を持つのかということが分かりにくかったので、それが一本化されて、新教育長というかたちになりました。2 つ目は、この総合教育会議を持って、招集権者は首長がするという。3 つ目は、教育に関する大綱を首長が設定する。豊岡では「とよおか教育プラン」がその大綱になります。

それで、総合教育会議の意義ですけれども、まずは、今言った教育大綱を作り、それが本当に効果があるのかどうかということ、そのことについての協議をします。2つ目は、教育の条件整備など、重点的にすべき施策があれば、ここで論議をし、具体的に施策展開になっていく。3つ目は、大津のように、児童生徒の生命・身体に関わることで、緊急に協議しなければならないこと、この3点について、総合教育会議で協議することになりました。

そんなふうにして、首長と教育委員会が同じ教育施策の方向性を持って、共有をして、そして、執行することが最も子どもたちにとっていいだろうという、そういう判断であります。

その時に、改めて確認されたことがあります。1つは、教育委員会は独立行政執行機関だということです。つまり、教育委員会に付されている使命は3つ。教育の政治的中立性、2つ目は、継続性、3つ目は安定性です。つまり、政治が変わったり、首長が代わることによって、コロコロと方向性が変わるとか、安定的でないことをするとか、継続してきたことが途切れるというようなことがもしあれば、それも子どもにとって非常に不幸なことなので、それはしっかりと教育委員会でやりなさいということです。

それで、教育委員会のやることは、教育機関を管理して、学校の組織再編、教員に関する組織再編、それから、教育課程、カリキュラムと言われるものです。それから、教科書や教職員の身分に関する取り扱いを教育委員会はしましょうということです。なので、教育課程というのは、例えば国語を何時間教えるとか、算数や数学を何時間教えるとか、これはもう学習指導要領で決められていますので、このことについてはどうすることもできないのですけれども、こんな教材を使って、こんな教え方をするということは、学校が判断できる。カリキュラム編成の権限は校長、学校にあります。それをちゃんとできているかどうかということ指導するのが教育委員会という立場になります。

ただ、国語や算数は今言ったように、決められているからいいのですけれども、そうではなく、市独自の教育施策、市のいわゆる財産、「ひと・こと・もの」を使って、豊岡らしい教育をするときには、どんなことができるだろうかということは、学校だけではできませんので、教育委員会と一緒にあって、学校と協議をして、プランを練る。うちの場合だと、ワーキンググループというものを校長が作っていますので、それでこのぐらいの時間でふるさと教育をしようとか、あるいは、豊岡独自の英語教育はこういう方法でやろうとか、コミュニケーション教育もそうです。非認知能力の取組についてもそうです。教育委員会が一方的に進めるのではなくて、学校現場と相談しながらやっという、そういうことであります。

首長はというと、教育財産の取得及び処分に関する事、それから、2つ目は、教育委員会の所掌に関する契約を結ぶということが、首長の仕事であります。3つ目は、その教育委員会の所掌に関する予算を執行するという、ものすごく大きな、こういう仕事を市長にはしていただかなければならないということです。なので、どんなに立派な教育過程の編成をしようとか、教育施策をしようと思っても、首長がそれに納得し、「そう、その方向でいこう」と言ってもらわないと、教育予算がつかないわけですし、学校現場の幸せ、子どもの幸せになるのかどうかというのは、やはり両輪と一緒にあって協議をするということです。その最も大切なステージがこの総合教育会議です。私はこれをいつも楽しみにしていますし、大切に思っています。

私たちが市長とともに作っていった教育大綱の教育プランですけれども、どんなことを根拠にしながら作ったか、詳しいことは後で担当が言いますけれども、それは、1つは、子どもたちの実態がどうかということです。子どもの事実を学ぼうということをやっていますので、子

どもにとって、よいことかどうかということをもまず、最初に考えます。

2つ目は、先生たちの実態です。先生たちが、どんなことが得意で、どんなことに心を砕いており、どんなことに悩み、どんな課題を持っているかということ。どんないい施策でも、先生がふらふらになったらできませんので、そのような先生の実態です。

近年、大きな問題があります。小規模校化です。自分の学校のスタッフがとても少ないので、校内で研修ができなくなってしまいました。かといって、教育委員会が展開する研修会をすると、働き方改革のことで、なかなか時間が取れないという実態もあります。ここは悩みどころなのですけれども、年々こういうことを考える若い先生たちが出てきて、大きな学校を希望して、そこで研修をしたいというような、そういう志を持つ先生たちも増えてきたというのが最近の特徴です。研修に関しては、そういう難しさが少しあるということです。ただ、先生たちの持ち味やいいところをたくさん生かしながら、施策展開をしていきたいと思えます。

3つ目は、保護者です。保護者がどんなことを願い、どのような実態なのかということ。当然、学校教育に関心がおありの方、理解がおありの方、協力的な方、家庭教育に熱心な方もおられますが、そうでない方もおられます。よって、子どもたちの生活習慣にもかなりの差が出てきています。虐待も増えています。家庭への指導も必要な保護者が増えてきたので、スクールカウンセラーとか、スクールソーシャルワーカーとか、こども支援センターに在籍している家庭相談員の仕事が増えているという状況にもなっています。

それが大綱の根拠、エビデンスなのですけれども、小中一貫教育にしても、あるいは、GIGA スクール構想に基づく ICT を活用した教育にしても、あるいは、トライやる・ウィークや自然学校という体験的な学習にしても、キャリア教育にしても、防災教育にしても、すべては方法論です。施策です。その方法論のいちばん上にあるのが、教育プランの目的と言いますか、どんな子どもに育てたいのか、どういう考え方でそういう施策をするかということですので、今日はそのことをここで十分議論をしていただき、市長からも分からないところ、意見等ありましたら、この場で今日、微調整するというのが、この会議の大きな使命ですので、それをお願いしたいと思います。

ちなみに、この会議から生まれたのは、こども支援センターです。ここで協議をし、不登校がととも増えている。それから、特別支援を要する子がととも増えている。あっちこっちバラバラに対応する機関があってはダメだということで、ワンストップのこども支援センターを作り、今は年間5百も6百も先生たちや保護者からの問い合わせがあり、出張というか出かけていっていますし、2千、3千を越えるような教育相談がありますので、そんなふうに、次の展開にこの会議が関係するような、そういう仕事ができる会議になることを望みますので、教育委員の皆さんに忌憚のない意見をいただき、進めていきたいと思えますので、どうぞよろしくお願ひします。

### [日程3 協議事項]

(堂垣教育次長)

ありがとうございました。それでは、協議事項に入らせていただきます。内容について、補足説明をするために、担当部局の職員が出席しておりますので、ご了承いただきたいと思えます。

本日の議題は、先ほどもありましたが、「第4次とよおか教育プランについて」ということでもあります。今回の会議は、関貫市長就任後の初の総合教育会議となりますので、市の教育の方針及び主な取組につきまして、2020年2月に策定し、その同じ年の5月の総合教育会議におきまして、

豊岡市の教育の振興に関する施策の大綱に位置づけられました「第4次とよおか教育プラン」を基に意見交換を行っていききたいと思います。まず、プランにつきまして、こども教育課が説明をいたしますので、よろしくお願いします。資料はNo.1になります。

(内海こども教育課参事兼教育研修センター所長)

こども教育課の内海です。豊岡の教育について、私のほうから説明をさせていただきます。前の画面を見ながらお聞きください。

「第4次とよおか教育プラン」は、今年2年目を迎えます。目指す子ども像を「ふるさと豊岡を愛し 夢の実現に向け挑戦する子どもの育成 ～非認知能力（やり抜く力・自制心・協働性）を子どもたちに～」としています。14年間、豊岡市は小中連携教育に取り組んできました。そこで3つの教育課題が明らかになりました。

1つ目が学力の問題、2つ目が不登校の問題、3つ目が特別な支援が必要な子どもへの教育的ニーズの問題です。加えて、新しい学習指導要領で国が求めている子どもたちに育成すべき資質能力として「学びに向かう力・人間性」が示されました。主体的な態度、それから、感情や行動の統制、人間関係の形成など、国も重視をしています。これらを鑑みて、私たちは、非認知能力を豊岡市の課題改善を図るキーワードとしました。

次に、豊岡の3つの教育改革について、説明をいたします。まず、学力の問題です。全国学力学習状況調査の結果では、正答率40%以下の児童生徒の割合は、全国平均と同程度です。±5ポイント以内は同程度ということになっています。二極化は改善されてきています。また、平均正答率は、全国平均と同程度になっています。しかし、課題として、活用する力の育成が挙げられています。今後さらに授業改善、学力を支える非認知能力の向上の取り組みを推進する必要があります。

続いて、不登校の問題です。不登校児童生徒とは、年間30日以上欠席した子どものことを言います。まず、不登校の中学校1年生における新規不登校生徒の割合、つまり、中学校になって新たに不登校になるということは、ある程度押さえられています。また、全児童生徒に占める不登校児童生徒の割合はほぼ横ばいとなっていますが、不登校の要因は複雑化・多様化が進んでいます。2019年度の要因の分析です。家庭に係る状況・学業の不振・いじめを除く友人関係などが要因となっていますが、1つの不登校には、複数の要因が複雑に絡んでいます。豊岡市では10年以上前から、資料としてお付けしておりますけれども、不登校対策アクションプランというものを作成して、全市をあげて対策に取り組んでいます。何度も改訂を重ねて、未然防止のポイント、不登校になってしまった子どもへの対応、保護者や関係機関との連携など、極めて具体的で実践的な内容が盛り込まれています。今後もこのアクションプランを活用し、子どもの状況を精緻に把握分析しながら、非認知能力の向上、関係機関との連携などに取り組む必要があります。

3つ目は、特別な支援が必要な子どもたちへの教育的ニーズの対応です。豊岡市はこれまで、特別支援教育の視点を取り入れた研修会の開催、専門家を招聘して、教員が学ぶスーパーバイザー支援事業を行って、教員の専門性の向上に取り組んでまいりました。しかし、各校園では、特別な支援が必要な子どもの数が増加しており、その実態は、多様化・複雑化しています。2018年には、616人の子どもについて支援が必要との要請が各校園からありました。48名の支援員を配置していただいています。支援員の配置により、必要な支援を受けながら、子どもたちが集団の中で安心して学んだり、1人1人の課題に応じた学びを丁寧に進めたりできています。今後、早

期からの切れ目のない一貫した指導や支援で、子どもたちの自立と社会参加につなげていくことが重要です。

こうした子どもの事実から、5年間の教育の骨組みとして作られたのが、「第4次とよおか教育プラン」です。多くの子どもの事実から、非認知能力が重要であると考えて、とよおか教育プランでは、非認知能力の向上を基本理念の実践の方向としています。

教育プランは、豊岡市教育振興基本計画です。5年間の教育について、どのような方向で改革を進めていくのか、その基本理念と方針を示したものです。これに対し、毎年取組を検証し、評価・改善を図っていくのが実践計画です。取組の改善点を見落とさないように、外部の検証委員から意見を聞き、評価・検証を重ねながら、改善を図っていきます。さらに、各校ではこれらに基づき、「夢実現力行動プラン」で子どもの実態に応じた特色ある教育計画を実践しています。

続いて、非認知能力向上事業です。小中学校では、学習指導要領が改訂され、2030年の社会と、さらにその先の豊かな未来を築くために、学校教育が果たすべき役割と、目指す姿が描かれています。新学習指導要領で示されている「学びに向かう力、人間性」が非認知能力と捉えることができます。認知能力は、非認知能力の上に成り立っていると言われていています。非認知能力はテストなどでは測れない、数値化できないので、やり抜く力や、主体性、コミュニケーション能力など多様です。この非認知能力の分類表をご覧ください。OECDが、3年おきに15歳の子どもたちを対象にPISA調査というものをやっています。これまでに学習した知識や技能を活用する力に重点が置かれています。これが新しい学力観として認識されて、新しい能力、非認知能力として、注目を集めています。

非認知能力は16の要素があり、それらの要素は2000年頃から、「生きる力」「人間力」「社会人基礎力」などといった21世紀型の能力として提唱されてきました。現在では、これらの能力はすべて、非認知能力、あるいは、社会情緒的能力と言われていています。表の中で、赤い四角枠で囲んでいるのが、豊岡市が大事にしている3つの非認知能力の要素となる力です。加えて、非認知能力は学力を一定程度押し上げる可能性があるとして、平成21年度の文部科学省の調査研究からも注目されています。

豊岡市が目指す非認知能力は、次の3つです。「やり抜く力」、これは主体性とか自己肯定感が要素となっています。2つ目が「自制心」、これは自己管理能力が要素となっています。3つ目が「協働性」、これは協調性とかコミュニケーション能力が要素となっています。この非認知能力は、すべての教育活動で重視し、取り組みを進めています。とりわけ、非認知能力の向上には、演劇などアウトプット型の表現活動が有効であるとされています。演劇ワークショップでは、演劇を学ぶものではありません。身体表現、言葉を使った話し合いや表現活動で、非認知能力を発揮・向上させていくきっかけとしています。

この写真は、昨年度、演劇ワークショップをしていたモデル校の1年生から3年生の写真です。このプログラムでは、表現活動を通して、非認知能力を向上させる仕掛けがいくつかあります。1つ目は、自分の気持ちや思いを受容される体験です。あるシーンを作り上げるまでのプロセスを特に重視しています。なりたい役をみんなに伝えて、どうやったら話がうまくつながるかを話し合ったりするなかで、自分の思いを受容される体験を重ねていきます。また、他者の考えを聞くなかで、異なる考え方を受け入れたり、他者との違いを認識したりもします。さらに、失敗や困難も経験します。違いが生まれたときの折り合いのつけ方、合意形成の仕方も大事にしています。教師にとっても、演劇ワークショップでの学びが、より豊かな授業づくりに役立つことを期

待しています。

昨年度、2月末の検証会議では、青山学院大学、荻宿俊文教授から、演劇ワークショップの後、「協調性・自制心は確実にプラスの変化が起こっている。休み時間や放課後の様子でも、協働性のプラスの変化が確実に起こっている。」そんな評価をいただきました。課題として、子どもの実態に合ったプログラムの開発が必要であるということも分かりました。今後も全市をあげて、非認知能力の向上に取り組んでいきたいと考えています。

ここからは、「豊岡こうのとりのプラン」の概要について、ご説明します。小中一貫教育のことで、2017年から、豊岡市では小中一貫教育に取り組んでいます。小中一貫教育は、「豊岡こうのとりのプラン」と呼んでいます。今年で5年目を迎えます。子どもにとってどうなのか、ということに基づいて、毎年課題を明らかにしながら、改善を図っています。

こうのとりのプランの特徴は、小中9年間を連続した学びでつないでいることです。ふるさと教育は小学校3年生から、「コウノトリ」「産業・文化」「ジオパーク」を共通教材として、中3まで、豊岡について学んでいます。英語教育は、小学校1年生から、ALTのネイティブな英語のシャワーを浴びながら、中3まで学んでいます。コミュニケーション教育は、すべての学年、すべての授業で、その育成を目指し取り組んでいます。学習指導と生活指導は、各中学校区で、特色ある取組を行っています。

まず、ふるさと教育から説明します。ふるさと教育は、総合的な学習の時間で取り組んでいます。年間70時間ありますが、コウノトリやジオパークなど、共通教材は10～15時間をかけています。例えば、弘道小学校では、20時間以上かけて出石のジオ遺産について地域の方から学んでいます。このように、共通教材を活かしながら、各校の特色あるふるさと教育が展開されているところが豊岡の特長です。

「ふるさと教育で豊岡のことについて詳しくなった」と回答した子どもたちは、小学生で92.7%、中学生で88.3%に上っています。保護者の94%が「ふるさと教育は子どもにとって有意義だ」と回答しており、子どもの発表を聞いて、「親として学びができた」「子どもの成長を感じた」など、肯定的な声が多く聞かれます。

英語教育は、園との連携もあって、小学校低学年で元気に英語遊びに取り組んでいます。中学校までの連続した学びが豊岡ならではの英語教育です。英語教育についても、年間必ずアンケートを取っています。英語教育では子どもたちはとても意欲的です。「英語の授業が楽しい」と思う子ども、「ALTともっと話したい」と思う子どもは、この表にある通り、高い値で推移しています。保護者からも、「何気なくしゃべった英語の発音が良くて驚いた」など、肯定的な声が届いています。

続いて、コミュニケーション教育です。コミュニケーション教育は、性別や年代を越えて、自己を主張し、他者を理解する基礎的なコミュニケーション能力の育成を目指しています。現在、各校の授業では、教科の授業も含めて、話し合い、対話などを取り入れて、すべての学校でコミュニケーション能力を発揮しながら学習を進めています。とりわけ、今の授業でも聞くことを大事にした授業が展開されています。

小学校6年生と中学校1年生では、演劇的手法を取り入れた授業を行っています。平田オリザ氏、田野邦彦氏に監修していただいたプログラムで、年間3回、7時間、担任が授業をしています。演劇的手法を取り入れた授業は、演劇を学ぶものではありません。短い劇を作り、その過程を最も大事にして、自己表現、他者理解、折り合いをつけることなどを学ぶ授業です。

こうした授業には、たくさんのエピソードがあります。ある授業では、場面緘黙の子どもがプロの講師の先生の問いかけに反応して、発言しました。そのアイデアをみんなが受け入れて、ストーリーを作り上げました。グループの友だちも1つ1つその子に目を合わせながら話しかけて、言葉がかえってきたり、うなずいたりしながら、発言したり、練習をしたりしていました。

また、右側の写真のように、中学校でも様々な生徒の姿が見られています。この写真のように、男女の垣根が全くありません。教科の授業でも、この演劇的手法の授業でも、すぐに相談し始める姿が非常に多いです。ある中学校の校長先生からは、「演劇的手法を取り入れた授業や、普段の話し合いでも、全く男女の垣根は感じられません。すぐに男女ペアで話し合いを始めたたり、考えを聞き合ったりする姿が当たり前の日常になっています」そんな話をお聞きしました。

昨年度、演劇的手法を取り入れた授業で「友だちと相談しながら、活動内容を決めることができた」と回答した子どもは、小学校で96.2%、中学校で90.2%でした。演劇ワークショップの中でも、これは子どもの声ですけれども、「自信になった」「他の教科の話し合いでも使えそうだ」と手応えを感じている子どもの声が多くありました。

教師の手応えについて、この演劇的手法を取り入れた授業をしたことがある教師、それから、参観したことがある教師に聞きました。小学校では全教員の80%、中学校では全教員の87%が回答しています。「演劇的手法を取り入れた授業は、コミュニケーション能力を高めるために有効だと思う」教員の割合は、小学校で90.2%、中学校で83.6%でした。その教員からは、下に書いていますように、「1つのものを作り上げる楽しさと難しさを感じていた」「チャレンジしやすい」「これまでに見たことがない一面を見られた」などの声がありました。加えて、保護者の98%が「コミュニケーション能力を高めることは大切だと思う」と回答しています。「社会でも必要とされている能力だから、授業の中で失敗しながら学び、成長していったほしい」そんな肯定的な声も寄せられています。

最後に、授業についてです。すべての学校、すべての授業で「5つの『徹底・継続』実践事項」という1時間の授業の組み立て方を基本として、「わかる」「できるようになる」授業作りに取り組んでいます。この取組は、今年で5年目になります。「話し合い、活動を通して、自分の考えを深めたり広げたりしていると思う」という子どもの割合は、小学校で83.6%、全国平均が76%です。中学生で78.8%、全国は72.8%です。全国平均を6ポイント以上上回っています。市内すべての学校で、こうした授業改善が確実に進んでいます。

一昨年、「先生はあなたのよいところを認めてくれると思う」子どもの割合は、小学生で92.7%、中学生で86.1%にのぼり、全国平均を大きく上回っています。コロナ禍で、昨年度はさらに伸びました。コロナ禍でも子どもたちに寄り添い、子どもの声を聞こうとする教師たち、その教師の肯定的な言葉を素直に受け止めてくれる子どもたち。豊岡の教育者、東井義雄先生の教え、「子どもの事実に学び、子どもに寄り添う教育」がこのようにしっかりと根を張ってきています。これからも常に課題を把握し、その解決に全市で取り組むとともに、豊岡ならではの教育を通して、1人1人の子どもたちの非認知能力の向上を目指してまいります。

(堂垣教育次長)

次に、こども育成課から説明をさせていただきます。資料はNo.2になります。

(山本こども育成課参事)

こども育成課の山本です。豊岡市の就学前の教育・保育について説明させていただきます。就学前の教育・保育につきましても、先ほど説明がありました「第4次とよおか教育プラン」の理念に基づき取り組んでいます。特に「あたま・こころ・からだ」の3つの力を支える基礎力の育成を目指し、第2次スタンダード・カリキュラムを活用しながら実践しているところです。豊岡の子どもの実態を踏まえつつ、幼児期は人間としてよりよく生きるための基礎を培う時期と捉え、目指す子ども像は、「自分が大好きな子ども・夢中になって遊ぶ子ども・友だちが大好きな子ども」としました。教育・保育の基本は、子どもにとって、園生活や遊びのすべてが学びの機会なので、どれだけ自分のしたい遊びを自分で選び、自分で決めて遊び込むことができるかが大切です。保育者はその遊びを通して、子どもの事実を読み取り、子どもを理解し、学んでいる過程を丁寧に認め、肯定的に意味づけすることが仕事です。常に「子どもにとってどうか」の視点で、1人1人に寄り添うことを基本に研修を深め、保育の質の向上に取り組んでいるところです。

次に事例です。公開保育で行われた、私立園の実践の一部です。ある日、子どもたちが園庭でカエルを見つけ、捕まえました。そのカエルは、自分たちが知っているカエルとは種類が違っており、色や特徴に興味を持ちました。また、捕まえるための方法もいろいろと考えていました。保育者は、その姿を受け止め、「すごいね。どうやって捕まえたの」「他にも何か生きものはいないかな」など、次の意欲や興味につながる言葉かけをしました。そして、子どもたちは、他にもいろいろな生きものを見つけ、捕まえてきますが、知らない生きものもいました。そこで、子どもたちの探究心が働きます。保育者は、子どもたちが主体的に調べることができるように、さりげなく絵本や図鑑を置くなど、環境を整えていました。予想どおり、絵本や図鑑を使って、生きもの探しに夢中になりました。保育者は子どもたちが満足いくまで楽しめる時間の確保もしました。子どもたちは、たくさんの生きものがあることを他の友だちにも教えたくまりました。みんなに伝える方法として、生きものをいろいろな素材で作ることにしました。「Aさんが工夫して作っていたよ」「Bさんに聞いてみたらどうかな」「Cさんに聞いてよかったね」「素敵な虫ができたね」子どもたちは生きものがいた場所が分かりやすいように、生きものマップを作ることにしました。「きっと、ほかのクラスの子どもたち、びっくりすると思うよ」など、保育者は肯定的で、子ども同士がつながり、遊びがつながる言葉かけをしていました。このように、子どもの主体的な遊びを大切に、教育・保育をしています。

豊岡市では、子どもの事実を読み取り、その姿から、どんなことを学んでいるのか、その学びを支えているのは何だったのかなど、保育者は振り返り、今後の関わりに生かすまなびの公開保育研修を公私立一緒に進めているところです。今後も引き続き、子どもの事実から学び、1人1人に寄り添いながら、保育の質の向上、保育者の資質が向上できるように取り組み、子どもの笑顔あふれる教育・保育を実践していきます。

(堂垣教育次長)

担当課からの説明は以上となります。この後は意見交換に移らせていただきたいと思います。まず、皮切りに、説明を聞かれた感想とかご質問がありましたら、市長のほうからお願いします。

(関貫市長)

後半の部分というのは、どこかの説明会が行われた時に出た内容だったと思います。

(堂垣教育次長)

少しありましたね。そういったものが。

(関貫市長)

これまでに聞いたことがある部分もありました。聞いている中で6ページに非認知能力の取組というのが出ています。「やり抜く力・自制心・協働性」を特に力を入れてやっているということをおっしゃられたと思いますけれども、非認知能力のたくさんある項目の中で、これらを選択したという何か強い理由というのがあったのでしょうか。

(内海こども教育課参事兼教育研修センター所長)

文科省の学習指導要領でも、その3点が大事だということで描かれています。

(嶋教育長)

非認知能力には10以上のカテゴリーがありますけれども、その中で分類したのは、「学校がこの資質を鍛えるのが得意なこと」「家庭が得意なこと」あるいは、「地域の力を借りなければいけないこと」という分類をして、学校が得意なこと上位3つとして、「やり抜く力・自制心・協働性」を選んだと、そういうことです。これは、文科はこのかたちで言ったり、OECDという世界中の先進国が集まった調査ではまた別の言い方をしているのですけれども、それぞれ根拠を「子どもの実践」で述べています。アメリカはこういうことをやっています。例えば、自制心の場合、子どもの前にマシュマロを持ってきて、先生はこれから外に出ていくけれども、教室に帰ってきたときに食べるのを我慢できていたらもう1個あげるよと言って、どうするか見ていて、アメリカらしい実験ですけれども、我慢できた子、いわゆる自分が自制できた子について、ずっと追跡調査をすると、例えば経済的な側面ですけれども、学歴が高かったり、犯罪率が少なかったり、よき納税者に育つのだというような、そんな調査をしていたりして、そういう諸外国の実践を見ながら、豊岡市としては、この3つを選んできたということなのです。

(関貫市長)

ここで、「やり抜く力・自制心・協働性」という表現を見ると、決して、これは否定されるものではないと思うし、これが身につけば、大変すばらしいと思います。けれども、このところにプラス、プログラミング教育というのが入ってきたのですけれども、それに類している論理的思考能力というのが、これらを活かす部分においては、また有効な能力として浮かんでくるというのをどこかで見たのですけれども、今後、そういったことを検討したり、プラスアルファにしていくというお考えはありますか。

(嶋教育長)

論理的思考力は、このカテゴリーに合うかどうかは別として、非常に重要なことだと思っています。ロジックですよ。今、子どもたちに求められている三角ロジックというのがあって、何か意見を言うときには、結論と根拠と理由づけ、この3つで論理展開するようにしましょうということを各教科でやっています。いちばん難しいのが理由づけです。「僕はこうしたいです。それは、ここにこう書いてあるからです」ということを言うのですけれども、これは根拠と、それか

ら結論です。「ここにこう書いてあることを僕は今までの経験とかお母さんやお父さんから聞いたことから、こう考えるから、こうしたいです」という理由づけは、なかなか子どもたちは難しいということで、それを授業の中で、いたるところでやっていって、それが「対話的な学び」と言われているものですが、これは先生がこうしますよと言っても、なかなか身につくものでもないで、市長がおっしゃるように、ロジックというのは非常に大切ですし、そのことは、学校の先生たちも認識していますので、引き続きいろんな場面でやっていく必要があると思っています。

(関貫市長)

今後の課題として、受け止めていただければと思います。そういう意味で、トータルとして非認知能力としてくくって、どんどん進めていけば、いま問題になっている子どもたちの内心の問題だとかも解決していくのかなというふうに感じています。

不登校という言葉はずっと前から問題になっていたのですけれども、不登校が長引き、卒業してからひきこもりにつながることはあるのでしょうか。

(嶋教育長)

こども支援センターは今日、来ていますか。

(堂垣教育次長)

今日は来ていません。

(嶋教育長)

データは誰か持っていないですか。不登校がずっと続くと、成人してから、あるいは、高校とかに行ってから、ひきこもりになる可能性が、豊岡であったかどうかというのは分かりませんか。

(関貫市長)

まあ、急な質問なので、ちょっとその辺が心配です。実際、ひきこもり自体が、成人のひきこもりというのは当然あるし、未成年のひきこもりもあるし、子どもというカテゴリーのひきこもりも実際あるのはあるのですね。今言ったように、不登校とひきこもりに、どういうリンクがそこに発生しているのか、それを意識しているならば、それを対応、対処すればいいと思うけれども、仮にそういう意識がなければ、何か考える必要があるのではないかなというふうに、不登校に関してはちょっと思いがありました。

(嶋教育長)

不登校はさまざまな原因がありますので、例えば、病気が起因しているような場合は、多くの場合、これは一般論ですが、そのままずっと成人まで引き続くということもありますし、家庭環境をよくすることで改善されることであれば、学校と家庭が連携すればいいわけですし、学校の友だち関係であれば、そこを改善すればいいことなので、アクションプランに「不登校を起こさないために」と、「不登校が起きてからどうするのか」と、2つに分けてやっていますけれ

ども、全く無縁ではないと思います。すごく危機感を持たなければならないと思います。

(関貫市長)

そういう感じで、よろしくお願いします。

9ページの小中一貫教育の中で、ちょっとお聞きしたいです。ここには、ふるさと教育ということで事例が5つほど載っているのですが、ふるさと教育という言葉からのイメージで言うと、今だったら、豊岡市というふるさと、その内容を子どもたちに教えるというふるさと教育というのがあると思います。それがまずあって、その中にまた、ここに書いてあるような、各地区別の事象がふるさと教育をやる中にあるというふうに認識をしております。その割合というのは、実際どのようなものですか。全体が5で、ローカルが5だとか、7:3とか、そういう定義的なものはありますか。

(内海こども教育課参事兼教育研修センター所長)

総合的な学習の時間は70時間、小学校3年生が70時間、4年生も70時間と、年間時間数が決められています。どういうカリキュラム、どういうことを学ばせて、これを何時間配置するかというのは、各学校の校長先生が、各学校で判断します。豊岡市としては、校長先生方のワーキンググループで、「コウノトリを50時間やってもいいのではないか」「いや、それは多すぎるだろう」というような議論がたくさんあって、少なくとも10から15時間だったら、コウノトリは3年生で15時間しましょう。産業文化は4年生で10時間やりましょう、というようなことです。共通のものについては、時間数をグッと押さえたかたちになっています。ただ、学校によって、例えば三江小学校の場合、近くに郷公園がありますから、ものすごい豊かなプログラムを持っていて、コウノトリに時間をたっぷりかけて学んでいます。逆に、弘道小学校などは、それも学ぶけれども、独自のプログラムを持っていて、出石のまちの中で、人に接することをしながら、出石の文化について学んでいます。

(関貫市長)

なるほどね。それは普通のやり方ということだと思いますけれども。あるところでは、その地区に関する内容をもう少し学校で子どもたちに伝えてほしいという要望を聞いたことがあって、ということは、学校では、あまりやっていないからかなと感じたものですから、割合のことを聞きました。やはり地区ごとの文化・伝統、それをどこまで重んじるかということも重要です。地区の人にとっては大事なカテゴリーになってくると思うのです。それを子どもたちにちゃんと伝えていくという行為はコミュニティでと言うのかどうか分かりませんが、学校教育のそういう時間があるならば、もっと行ってほしいという声を聞いたので、聞いてみました。

(嶋教育長)

ふるさと教育はさっき内海が言ったとおりですし、学校によっても様々ありますので、今、市長がおっしゃったような意見が学校に入ってくれば、学校も対応できたと思いますけれども、なかなか入ってこない。入ってくるようにするシステムとして、コミュニティ・スクールを考えていますので、プラットフォームですから、「先生、地域のことをもうちょっと勉強して」という話が出たら、それはそれでまた具現化すると思いますので、そういうかたちで耳に入ってくるとい

うことが大事だと思います。

(関貫市長)

入ってくるというのは受動的なので、学校がもっと地域に聞きに行くということも必要ではないかと思います。

次に、就学前のスタンダード・カリキュラムがありますよね。これは何度も聞くのですが、これは市が作成した一定のものを公私立すべての園に提示しているということは間違いないのでしょうか、実際、それぞれの園が実践されているという、何かエビデンスは感じていらっしゃるのですか。

(山本こども育成課参事)

それにつきましては、今、活用の手引きを作成しているところです。先ほど事例を話させてもらいましたが、公開保育を通して、集まってもらった先生方が、子どもの事実を見ながら、スタンダード・カリキュラムを基に、「今、この子たちが育っている姿はここだね」とか、「これをまた次につなげるには、どういう環境を整えたらいいかな」というように、みんなで話し合いながら進めることで、それぞれの園での実践や活用につながっていると思っています。

(関貫市長)

それ以上のことは、各園の特徴だということによるというのは間違いないですか。

(山本こども育成課参事)

はい、そうです。

(関貫市長)

逆に、スタンダード・カリキュラムに 100 あるところが 70 しかできていないので、「もっと頼みます」などという事象は感じていらっしゃらないですか。

(山本こども育成課参事)

子どもの育ちを大事に考えているので、子どもの見方、子どもの育ちをどのように見るかという職員の資質が大事になってくると思います。子どもの見方についてはやはり丁寧に見たり、子どもとの受け答えなど対応をみんなで勉強し振り返り、子どもの育ちにつながるようみんなで取り組んでいるので、数値とかレベルとかというところは、まだちょっと分からないですが、職員の資質の向上が保育の質を上げていくと考え取り組んでいます。

(関貫市長)

当然、そういうふうを考えるべきだと思いますし、しなければいけないと思います。この各私立園は、本当に皆さん、頑張っておられるというのは感じられているはずですが、それと公立園と比べてどうかということも、ある場面では聞いていらっしゃるかは分からないけれども、教育委員会としては、そこに差異があるということは、全然聞かないですか。園ごとの。その辺はどうですか。公立と私立だけではなくて、私立園でも私立園ごとの差異があるというようなことを

聞くことはないですか。

(山本こども育成課参事)

特に。

(関貫市長)

あまり耳にはいらぬかもしれないけど。

(山本こども育成課参事)

園の特色もありますので、差異というようなことは聞いてはおりませんし、私立園さんも公立園も、みんなで研修しようと、「まなびの公開保育」研修では、去年 12 園公開しましたところ、公立・私立合わせて 140 名程度の職員の方に来ていただきました。研修会ではグループ別に子どもの事実を読み取り、関わりなどお互いに気づきもあり、勉強になっているということも聞いているので、今後も継続して取り組むことで深め安心していただけるようにしたいと思っています。

(嶋教育長)

でも市長、それは当然ありますよ。差は。小中学校だってありますから。ぜんぶ公立だけど。保護者にとって、自分の子はどうかということ言えば、「うちは足らん。〇〇の学校はこんなことをしてくれている」というのもあるし、それから、モデルになる教員がいるところで、学び手として、意欲のあるところがあったら、すごく先進的な教育をやったり、あるいは、子どもにとって、すごく丁寧な教育をやったりという、そこら辺で差がありますから。学校訪問は全部の学校でしますし、園も全部しています。その中で、情報は聞こえてこないけれども、ここの先生のここのところは、こう活かしたほうがいいのかとか、もっと園全体で、学校全体で、ここの点は注意したらいいのではないかというように、当然差異がありますので、そこは指導に入っています。ないことはありません。広がらないようにどうするかということを教育委員会として、できることをやっていくということです。

(関貫市長)

それが無いという認識なら、ちょっと困ったなと思いますけれども。あることを認識して、そこはなんとか改善するという方向で、皆さん、動いていただければと思います。断片的に聞いて申し訳ないけど、これでだいたい分かりました。

(堂垣教育次長)

それでは、今の市長のお考えや質問などを含めて、また、教育委員さん方が普段学校のほうに訪問していただいたりして、感じられたことも含めて、ご発言いただければと思います。佐伯委員さん、いかがでしょうか。

(佐伯委員)

非認知能力向上のための演劇ワークショップをやっていますけれども、市長が以前、会見で、「人間力を高めよう」という言葉を使っていたらっしゃいました。その人間力を高めるというのも、

この非認知能力のプログラムの中に入っています。演劇を取り入れた授業に対して、演劇という言葉はどうだろうということの一部言われていたと思いますけれども、その後その授業はご覧になったことはありますか。

(関貫市長)

実際、やっていらっしゃるところは見たことがないです。

(佐伯委員)

では、ぜひ。どういう内容か実際見てもらったほうが分かりやすいと思いますので、授業をやっているときに、私たち教育委員も同席させていただきますので、ぜひ一緒に。

(関貫市長)

はい。ぜひとも。

(佐伯委員)

ご覧いただけたら、またよく分かっていただけるかなと思います。いろんなパターンの子どもさんがおられますが、演劇プログラムの授業では、本当に自由に発言をされています。この子にはこういうところがあるんだという新たな発見がたくさんあると思いますので、ぜひ一緒にご覧いただきたいと思います。その学校訪問の中で、先生方の日頃からの頑張りや、子どもへの寄り添い方なども実際目にさせていただけるかなと思います。また、先ほど説明にありました＜男女の垣根がない＞という部分ですが、「じゃあ、話し合ってください」と言ったら、本当にすぐに数人のグループになって、男女の垣根なくみんなが自由に意見交換している場を見ることができます。ぜひ市長にも一緒に学校訪問をしていただきたいと思います。

(関貫市長)

はい、分かりました。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。6月から始まりますので、また、よろしければ、いつでも日程調整させていただきますので、よろしく申し上げます。成田委員さん、いかがですか。

(成田委員)

新市長、よろしく申し上げます。私は実年齢ではなく、いちばん若い教育委員でありまして、本当に勉強させてもらいながら、なんとか豊岡の教育、子どもたちのためにできたらいいなという思いをもって、務めさせてもらっております。

頼りにしているのが「ふるさと豊岡を愛し、夢の実現に向けて挑戦する子どもの育成」という、このテーマそのものです。そこで考えているのですけれども、まず、「ふるさと豊岡を愛する子ども」ということは、愛すべき豊岡がそこにあるということ、そして、その豊岡は子どもたちの夢を育む豊岡であるということ、それらの理解の仕方をしています。

もう1つは、「夢の実現に向けて」ということがありますけれども、子どもたちは、夢の塊だと、

そして、中に夢の種を持っている。そのような見方をしております。そのような目で見ているのかなと思っているのですけれども、実際に子どもを見る機会が多いほうが絶対いいということで、学校訪問や園訪問に行くのはとても楽しみにしているのですし、やはり動いている子どもや、先生の様子を見ることは、私も楽しみにしていることでもあります。あとでいろいろ考えますから。いつも夢の種はどのように動いているのかというようなことを見ますので、とても大事にしています。

もう1つは、登下校見守りボランティアをずっと務めさせてもらっています。今まで教育委員をするまではしていなかったのですが、子どもたちの登下校の様子を見させてもらっています。その中からも、何も会話はしないけれども、夢の種がいろいろと伝えてくれることがたくさんありますので、非常に有難いことだと思っています。

そういうような子どもたちが豊岡の中で夢を育てていってくれる。その夢をどれくらい実現していくのか分かりませんが、豊岡に帰って、豊岡でその夢を実現する子どももいるでしょうし、あるいは、世界のどこかで実現していく子どもがいるかもしれませんけれども、根っこは豊岡が育てたものだというような、そんな気持ちで教育というものが進んでいったらいいなという思いであります。

これから市長には豊岡のまちづくりに励んでいただくのですけれども、ぜひ、市長の豊岡のまちづくりの夢をまた私どもに聞かせていただく機会があれば、とても有難いかなと思います。できるだけ教育委員として、子どもたちにそれに即した計らいができれば、そういう意味で有難いかなと思います。1つお願いと言ってはなんですけれども、しておきたいと思っております。

もう1つ、昔、私は学校の教員をしておりました。その頃と今見る子どもたちや学校の様子は、全然違います。コミュニケーション教育の話が先ほどから進んでいますけれども、まず、驚くのは、授業形態の中で男女がペアになって、すぐに話し合いをするのです。小学生は当然あってもいいのですが、中学生でもすぐに男女でグループを作って、話し合いをしながら授業を進めていくという光景をたくさん目にします。こういうことは私も経験がなかったことで、これは、これまでの教育委員会がずっと取り組んでこられた1つの成果だと思って、非常に好ましい授業スタイルだと感動的にそれを見ています。

もう1つは、朝、パトロールをしていますと、小学生もそうですが、どんどん中学生のほうからあいさつをしてくれます。私も中学校で指導していたことがありますけれども、以前はそのようなことはありませんでした。これもたぶん、1つの理由だけではないと思いますけれども、子ども同士が関わり合って授業を進めていく、その関わりというのは何も子ども同士の関わりということではなくて、たぶん地域の方や、いろんな関わりの中で、子どもたちがコミュニケーションの経験をさせてもらっているのだと思います。そういう中で、自然と生まれてきた態度かなと、学校の指導とか、そういうのではなくて、自然と生まれてきたことかなと思っています。先ほど夢の種ということを言いましたが、その夢の種がそこにも育ちつつあるのかなというような感じを持っております。

3つ目ですが、先ほどの市長の懸念と言いますか、お話の中で、不登校への心配ということがありました。昔、私が学校に勤めていた頃からというか、かなり前からこの問題はずっとある問題でして、大変難しい問題だと認識しています。昔から比べたらずいぶん、中1ギャップをなくそうということで、小中の連携というものが、私が勤めていた時代と比べて、飛躍的に進められていますし、教育の中で、小中一貫というような意識をととても大事にしながら、そのような取組

がいろいろなかたちで進められています。加えて、不登校というのは本当に難しいところがありまして、それで不登校が解消されたということには、なかなかつながらないかもしれませんけれども、少なくとも子どもを一所懸命見る。そして、それを小学校と中学校を密接につないでいくというこの取組は、少なからずの成果は出ているのではないかと考えています。本当にこれは懸念すべき大きな問題で、教育委員会はそれをよく把握していると思いますので、今後とも市長と一緒に考えさせてもらったらと考えております。

(関貫市長)

ありがとうございます。

(堂垣教育次長)

向井委員さん、いかがでしょうか。

(向井委員)

先日、辞令をいただきました向井です。よろしくお願ひします。私は4年前に初めて教育委員になったときに、豊岡市の教育施策をお聞きして、心躍るというかワクワクした思いがしました。ふるさと教育・英語教育・運動遊びなど、豊岡市の教育施策は、但馬はもとより全国でも大変進んでいると思っています。

特にコミュニケーション教育に関しては、そのような思いを強く持っています。今はなくなっていますが、以前は但馬女性教育委員研修会というのが年に何度かあり、他市町の授業が見学できる、とてもよい機会になっていました。他市町のある女性委員さんから「豊岡のコミュニケーション教育の授業をぜひ見せていただきたい」と言われ、2回ほど豊岡の中学校・小学校の授業を見ていただきました。大変好評で、「とてもいい教育だ」とお褒めの言葉をいただいています。私も何度か参観したことがあります。よくあれだけの短い時間に、こんなにも子どもたちは変わることができるのだと、感動を覚えたことがあります。

グループ活動の中では、支援の必要な子が、グループの中でリーダー的な力を発揮している場面がありました。また、演劇的手法を用いた低学年の授業では、ある男の子がマフラーを被って、最初は全然子どもたちの中に入っていけませんでした。隅のほうで小さく固まって、授業に参加しなかったのですが、時間が経つにつれて、いちばんリーダーシップを発揮するようになり、みんなに分かるように演劇で自分を表現するという、そんな場面を何度か目にして、とても感動しました。ぜひ、そういう子どもたちの姿を実際に市長も見ていただけたら嬉しく思います。

コミュニケーション教育は、算数など今までに蓄積された自分の力がなくても、その場でパツと発揮して、いろんな活動ができるという、普通の授業では見ることができない素敵な子どもの一面が見られ、とてもよい授業だと思っています。

中学生になると台本作りもしますので、その話し合いの中で、自分と他者の意見のすり合わせをするのです。お互いの意見が違ったとき、きちんと相手の意見を聞き、自分の意見も言って、うまく折り合いをつけながら1つの台本を作っています。それを演劇で披露するということは、ただ与えられた演劇をするのではなくて、作る過程で大切なコミュニケーションを学んでいます。これから生きていく上で、とても大事なことを学ばせていただいていると思っています。市長には、そのようなことを理解していただいて、豊岡市の子どもたちが夢を見つけ、夢に向かってい

けるように、ぜひお力を貸していただけましたら嬉しいと思います。よろしく申し上げます。

また、私は先生方の講習会に何度か参加させていただいたことがあります。外部の講師の先生を招いて、夏休み中によく講習会を開催されています。中でも、特別支援教育に関する関西国際大学の百瀬先生の講演会はいつも満席で、1日に2回あってもいっぱいになっていて、本当に熱心な先生方が多いです。百瀬先生は、いつも最後に「これだけ一所懸命、前向きに勉強している先生方が多い豊岡市は、絶対に安心だね」とおっしゃっています。先生方は、もっともっとよくしようという思いをもって、本当に一所懸命勉強されていると思います。

(飯田委員)

教育委員は4年目になります。私はこの教育プランというのは、非常にコンパクトにうまくまとめているなど、嬉しく思っています。先ほど、市長がおっしゃった「ふるさと教育」「非認知能力」「小中一貫教育」の件について、ちょっと思いを伝えさせていただきます。「ふるさと教育」というのは、確かに豊岡がこれだけ広くなったものですから、なにか漠然として、分かりにくい部分があるのではないかというような見解をお持ちだと思いますけれども、地域に帰れば、子どもたちというのはいろんな体験だとか、物事に接することによって、初めてそのものの良さだとか、いろんなことが分かってくるのではないか。その中で、愛おしさが湧いてくる、そこに「ふるさと」というふうな感じがあるのではないかという気がしています。

例えば、私は清滝、神鍋の出身ですので、小さいときからスキーをずっとしていました。そうすると、社会人になっても「俺のところにはスキー場があるんだ。ぜひ一緒においでよ」というふうに誘ったり、あるいは、桜があつて、桜の歌も作ったりして、「すごくきれいな桜なんだよ」「これはいいね」というような、子どもたちの心に愛おしさが生まれてくる、そのようなことが「ふるさと教育」の始めではないかという気がします。

先日も私が田んぼに行き、トラクターで作業をしていますと、コウノトリがつかいで来て、泥水の中の餌を狙って来るのです。「俺の豊岡市はコウノトリがいるんだよ」というようなことを子どもたちは大人になって、社会に出てから外に発信できる、そういうことが芽生えることが「ふるさと教育」ではないかと思うのです。豊岡は広いから、いろんな地域にそれぞれのふるさとというのがあっていい。豊岡全体をそうする中で、「俺のところはこうだけど、豊岡市の中には海もあり、川もあり、こんなにいいんだよ」ということを感じてくれる子どもをどれだけ育てるかということかなというふうに感じました。

ですから、70時間よりもっとほしいと思いますけれども、この「ふるさと教育」は、とてもいい教育だなと喜んでいきます。学校が絡んでいるのですけれども、学校でできない部分がいっぱいあるのです。これは、地域がどれだけ協力するか、あるいは、関係者の方がどれだけ子どもたちに、どのように接していただけるのか、ふるさとを子どもたちに伝える1つの大きな環境ではないかと思います。その環境を作るのが地域であったり、親であったり、そんなことを作ってやるのが我々の責任かなと「ふるさと教育」については感じています。

非認知能力の関係ですけれども、文言として難しいように思いますが、僕はそう重く捉えていません。かつては、家族も多かったし、地域の人口も多かった。子どもたちも多くて、そういう群れの中でいろいろな体験をしていた。自然の中での野外活動というか、川で泳いだり、川の中の魚をついたり、野菜畑でナスやキュウ리를もらったり、そのような環境の中で異年齢の子どもたちが一緒になって過ごしていた。そんな中で、今言われている「やり抜く力」が生まれて

きた。「僕はこれだけ泳いだよ」「お兄ちゃんがあんなに高いところから飛び込んでいる。僕もやってみよう」そういうふうな部分というのは、数値に表れない、たくましく生きる力を育むのではないかと。それが今、大きく社会が変わってきてしまったので、あえて教育のカテゴリーの中で、そういうことをプランニングしなければならない時代になってしまった。ある意味では残念なことです。今、少子化の問題がありますが、群れというのはとても大事ではないかと思っています。そういう意味で、いろんなところが野外活動を全部プランニングしてもらっていますけれども、それは作られたプランニングですので、そうではなく、もっと自然体の中でやればもっといいなと思っています。

小中一貫の件では、以前から中1ギャップの問題がありました。私事で申し訳ないですが、きょうだいが多ければ、お兄ちゃんが中学生なら、小学生の子はお兄ちゃんを通じて、小学校と中学校との橋渡しを上手に、日常の会話の中でやってくれていました。あるいは、中学校と小学校が近くでしたから、小学校で運動会をしていたら、中学校にはきれいな200のトラックがあるよ。先生があそこで走ろうと、タイムを測ってくれました。中学校の陸上部の先輩が出てきて、いろいろと教えてくれる。そのことによって、「中学校って陸上部というのがあるの」ということで、エスカレーターを上手に上れたというふうに思ったのが私の体験です。

こういうことが小中一貫教育のよさであり、あり方かなと思います。今、豊岡の場合、学校が離れていますから、どういうふうに小中を連携させるのかというのは難しいですが、せめて一所懸命環境をよくしてほしいと思います。今、それぞれ一所懸命やってもらっていますので、いい状況にあります。このプランニングの中で、僕はいいかなと思いました。

教育環境は社会の環境の変化によって、ずいぶん変わってきたというのが率直な私の意見です。私も教育委員になった頃、目から鱗で、私の頃の授業と今の授業では、雲泥の差があります。今のほうが遥かに子どもたちの学びの環境は開かれております。みんなで支え合う風景が授業の中に見受けられ、とても喜んでおります。僕たちの頃は一方的な講義方式ですから、その時についていけなければ、一所懸命先生が黒板に書いたものを写すので精一杯で、それに時間を取られていた気がします。今は友だちが教えてくれたり、いろんな考えの友だちと話し合える。話し合いの中から、本来の答えが見いだせる。のびのびと子どもたちが自己主張できる環境にあり、すごくいい環境だと思います。それをぜひ守ってやりたいという思いでおります。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。時間が押してまいりましたが、教育長、よろしいですか。

(教育長)

今、聞かれて、市長、何か感想がありましたらお願いします。

(関貫市長)

私が想像していた以上に、それぞれの教育委員さんというのは熱いなと感じました。今の意見をお聞きしても、飯田さんなんかは昔のことも言われたし、今の良さも言われたし、向井さんなんかは、今のまさにやっていることに対する良さを十分に感じていらっやあって、それを私にもどうぞとってくださいました。そういうのを考えますと、ちょっと前に、小学生ぐらいの子育てをされるお母さんと会って話をしたとき、今は子どもが群れないと言われました。そういった

環境が今ないのかなど。そして、ないがゆえに、例えばさっき言われた人間力だとか、コミュニケーション能力だとか、子どもたちの間の、それが欠けちゃっているのかなど。でも、今のお母さんはそれを認識しているのだから、それができるようにしてほしいという要求、要望がそこにあるのだろうなと想像していたので、これが教育委員会の問題ではなくて、市民全体の問題かは分からないですけれども、子どもたちが群れることができる。それはいろいろなかたちがあるでしょうけれども、そういった昔ながらのいいところも生かしていきたいなと感じていました。同じようなことを言われたなという部分を感じました。今は今で、これだけ発達してきた世の中です。論理的にも学術的にもいいことということでやっている。いい結果が出ているというのは明らかにあるので、それとの融合というか、折衷というか、新と旧、この辺はちゃんとしていかなければならないのかなと思いました。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。

(嶋教育長)

課題をちょっとお示しておかなければならないと思います。豊岡の教育プランのテーマが、「ふるさと豊岡を愛し、夢の実現に向け挑戦する子どもの育成」ですけれども、全国の学力調査、小学校6年生と中1をした結果、残念ながら、将来の夢や目標を持っているという数値が近々の調査では、中学校が4ポイント全国より低いです。その前の年も、やはり4ポイント低い。これだけやってるんだけど、夢や目標を持たせるような取組をもう1つ考えていかなければならないということが1つです。

2つ目は、ふるさと教育です。ふるさと教育というのは、豊岡にある「ひと」や「こと」や「もの」は、どんなのがあるという知識だけで終わるのではない。ここで終わってしまっただけでは、何年か経ったら忘れてしまいますので、どうすればいいかということ、その学習をした後に、自分が地域や社会にどんなことができるのかという、アウトプットの場が必要であるということです。いわゆるシビックプライドの醸成です。先ほどの数値も実は中学校でいくと、最近ほぼ全国並みになってきましたが、2、3年前までは、約5～6ポイント全国より低かったという事実があります。それから、小学校についても、いちばん近々の調査では、全国を10ポイント上回りましたが、ふるさと教育を始めた当初は、5ポイントぐらい全国より低いということがありましたので、これからのふるさと教育は、知識や理解を得た後に、どうするかということ、ここの指標で考えていきたい。これが2つ目の課題です。

3つ目は、先ほどからよく出ています、非認知能力。モデル校で実践して、今年度で3年の実証が終わります。2つの学校をモデル校として1・2・3年生のプログラムを作り、本当に非認知能力が育っているかどうかという、認知できないものを認知しようという、今そういう取組を青山学院大学と協働してやっています。その結果が出て、効果があった場合は、来年はすべての小学校1年生で全市展開したいという、これは学校や実際にやった人たちと話をし、そういう目標を持ってはいるんですが、これ、ファシリテーターというのは先生ができる仕事ではないです。ものすごく微妙な寄り添い方や話し方や子どもの理解というのが必要で、なかなか卓越した今までの経験値が必要だということ。それを先生たちにしなさいというのは、今の働き方改革の中ではなかなかできないので、地域の社会的資源である演劇について、こういう人たちに

ファシリテーターにお願いしようと思っておりますので、それにお金がいるのです。なので、ぜひとも、今日は政策調整部長が来ていますけれども、その時までには、効果測定をできるだけ急ぎ、協議の場を持たせていただいて、なんとか前向きな方向性が出たらなと思いますので、そのことをお願いしておきたいと思っております。

(堂垣教育次長)

ぜひとも予算だけは、教育委員会でお願しようと思っておりますので、よろしくお願いたします。時間が経過してしまいました。その他の部分で、先ほど成田委員さんからありました、市長のまちづくりの夢ですとか、以前も教職員の能力のこともお話しされておりましたので、その辺をお聞きしたかったのですが、またの機会とさせていただければと思っております。こども育成課から確認事項があります。

(木下こども育成課長)

幼児教育・保育及び放課後児童のあり方計画についてです。現在のあり方計画の前期、2025年までに幼稚園の再編統合を計画しております6地区に対しまして、6月2日から地区説明会を開催する予定にしております。ただ、報道等で緊急事態宣言の延長の話も聞こえてきております。もし、緊急事態宣言が延長されました場合、説明会の開催も困難になってくると考えております。その場合、もし延長されましたら、説明会につきましても、延期の方向で検討したいと考えております。

(関貫市長)

それは当然でしょうね。

(堂垣教育次長)

それでは、時間となりましたので、これをもちまして、2021年度第1回豊岡市総合教育会議を閉会いたします。

---

閉会 午後5時00分

---